

旦那様、その『溺愛』は
契約内ですか？

Nana & Minoru

桔梗 楓

Kaede Kikyo

termity



エタニティ文庫

目次

旦那様、その『溺愛』は契約内ですか？

5

書き下ろし番外編

夜空のパレードで交わす、幸せのキス

301

旦那様、その『溺愛』は契約内ですか？

プロローグ 突然の個人面談

生活用品の製造・開発を手がける大手メーカー、ハバタキユーズ。都内にある本社開発部で働く私こと、雛田七菜は、本日、上司の鷹沢部長に呼び出された。

手狭なミーティングルームで、テーブルを挟んで向かい合わせになっている私達。

鷹沢部長はノンフレームの眼鏡のブリッジを指で押し上げて、私を睨み付けた。さらにと冷たく、眼鏡のツルが光る。

——うう、怖い。憤怒の表情をした不動明王かと思うほど、部長はとつても顔が恐ろしくて、睨まれると震えてしまう。

そんな不動明王……じゃない、鷹沢部長は、机に置いていたノートを広げて、ボールペンのノック部分をカチリと押す。

真面目で堅物、社内一ストイックだと言われている鷹沢部長は、仕事にまったく妥協をせず、自分にも他人にも厳しい。そのあり方から社内では密かに『鬼侍』と呼ばれていた。

ハバタキユーズの社長子息という噂もあるのだけど、部長はプライベートをまったく話さないので、わりと謎に包まれた人である。

「雛田さん、急に呼び出してすみません。新プロジェクトに関して、いくつか質問したいことがあります」

「はあ……」

どうやら怒られ案件ではないらしい。私は内心ホッと安堵した。

私は新卒でハバタキユーズに入社し、開発部に配属されて以来、開発部部长である鷹沢部長には毎日のように叱られているのだ。すべては仕事ができない私が悪いのだが、同僚にも先輩にも『鷹沢部長は雛田さんに一際厳しいと思う』と言われている。

間違いなく、どんくさい私を嫌っているのだろう。

鷹沢部長はスタイルがよくて、肩幅が広くて、ビジネススーツ姿がピシッと決まっただけで、おまけに仕事もできる。実に完璧な人だ。もう少し人間味のある性格をしていたら、目に見えてモテていたに違いない。実際、怖くて声をかけづらいついけど、密かに憧れている女性社員は多いと聞いているし、私も入社当時は素敵な人だと思っていた。しかし今ではすっかり嫌われているのがわかって、その憧れも霧散したのだけだ。

「では早速、質問を開始します。現在、雛田さんには恋人がいますか？」

「いいびと!?!」

思いもよらない質問を唐突にされて、私は驚きの声を上げてしまった。すると鷹沢部長は『なにか?』と言いたげに、片方の眉を上げた。

「はい。プライベートな質問で申し訳ありませんが、答えてもらえませんか?」
「え、はい。……でも、えっ?」

オロオロと困惑する私だが、鷹沢部長は普段通りの無表情で、淡々としている。

——な、なんで恋人がいるとか聞くの? そんなの仕事に関係ある? ないよね?

でも、新商品の開発に必要な情報なのかもしれない。恋人のいるいないが、新商品にどう関わるのかサツパリ想像つかないけど。

「いません……」

ボンツと小声で答えると、鷹沢部長はノートにメモを取り始めた。

——え、待って。『雛田、恋人なし』とか書くの? 個人的にやめてほしい。だって、なんだか情けなくない? 雛田(二十三歳)恋人なし。って! どうせないよ! 見栄でも『いる』って答えればよかった。どうして素直に答えちゃったんだよ、私。

「では、恋をしている人はいますか?」

「こい!」

ふたたび目を剥いた私に、鷹沢部長は不機嫌そうに目を細めた。怖つ。

「もしか、いるのですか?」

「いやいや、恋なんてそんな……なに言わせるんですか……? い、いませんけど……」
ボンボンと答えて、また切ない気持ちになる。

どうせ恋人もないし、好きな人もいないよ。そして、しばらくは作る気もないよ。実は私は男性が苦手なのだ。もっと言うと、鷹沢部長は私的社内の苦手男性ランキン

グのトップである。

鷹沢部長は、私の返答に心なしかホッとしたような息を吐き、眼鏡のブリッジを指で押し上げる。

「そうですか」

ボールペンで、なにやら書き足す。さっきから一体なにを書いているんだろう。『雛田は現在彼氏がなくて好きな人もいなくて非常に干からびた人物である』とか……? イヤだな、そんな書き方されたら泣いてしまう。

メモを終えた鷹沢部長は、ボールペンを机に置いた。

「ちなみに、料理はできますか?」

「えっ? ま、まあ、できますけど、そんなに上手じゃないです」

「なるほど。では、掃除は?」

「……自分の部屋を掃除する程度なら、やっています」

「ふむ、特にこれといって得意というわけではない、ということですか?」

きらりと眼鏡のフレームを光らせて訊ねる。

「——なんだろう。得意じゃないとダメなのかな？ でも、ここで嘘を言うのはよくないよね。」

「はい。恥はずかしながら、そこまで得意ではありません」

料理はお母さんのごはん作りを手伝う程度だし、掃除だって適当だ。

すると鷹沢部長は「ふむ」と頷いた。今の頷きには、どういう意味があるのだろうか。

「わかりました。おおむね、問題ありませんね」

「あの、話がまったく見えないんですけど……」

「ぶしつけな質問をしたこと、謝罪します。説明は後日しますので、今日は終了とさせていただきます」

ノートを閉じて、鷹沢部長が言う。

「はあ……。ちゃんと説明してもらえぬなら、別にいいですけど……」

戸惑う私の脇を通った鷹沢部長は、すたすたとミーティングルームを去っていった。

パターンと扉が閉められて、私はグルツとうしろを向く。

「い、一体なんだったの？」

彼氏がいるのかとか、好きな人はいるのかだとか、家事ができるかどうかとか。どう考えても仕事にまったく関係ないよね。

「……はっ、ま、まさか、セクハラ？」

口に出してから、首を横に振る。

いやいや、あの鷹沢部長に限ってセクハラなんてありえない。銅はがねの男だよ？ スト

イックさ社内ナンバーワンの鬼侍だよ？

「新プロジェクトに関する質問って言っていたし、きっと新商品のアンケートだったんだよ。独身女性をターゲットにした商品開発とか、きつとそんな感じなんだ、うん」

無理矢理理由をつけて、自分を納得させる。そして私もミーティングルームを後にして、仕事に戻った。

幕間 開発部の井戸端会議

さて、俺はハバタキユーズ開発部のエース、木村と申す。開発部に配属されて五年。鷹沢部長に次ぐ古株だ。

「木村く！ あんたまた企画書の項目間違えてるよ！ 一体何年ここで働いてるのよ。後輩のあたしのほうが企画書の作成わかってるって問題じゃない？」

ベシベシと俺の頭に書類をたたきつける女は、可愛い顔をして生意気な後輩、古式である。

大先輩エースに対し、なんとという態度を取るのだ、この後輩は。だがしかしエースというのは俺の自称だから、敬われなくても仕方ない。そのうち鷹沢部長をぎゃふんと言わせてエースになる予定なのである。

「そういえば鷹沢部長、雛田ちゃん連れてどっかいっちゃったけど、またお小言かな」
 思い出したように古式がミーティングルームへと続くオフィスの扉を見つめる。

俺も頭にのせられた企画書を受け取りつつ、ドアを見つめた。

「ああ、雛田ね。あいつは本当に不憫だよな、鷹沢部長に目エ付けられてさ」

「あの子は総務部のほうが向いてそうなのに、なぜだか我が社の地獄に落とされちゃったからねえ」

「おのれの部署を地獄とか言うなよ」

俺がツツコミを入れると、隣でキーボードを叩いていた同僚がグルツと振り向く。

「いや、まさにここは地獄の部署さ。その証拠に、鬼の侍が部長じゃないか」

ハツハツハと朗らかに笑う同僚の額には、貼り付けるタイプの保冷剤がくっついていて。彼は今、作成中の企画が大詰めに入っているの、修羅の如く仕事をしているのだ。

「雛田は頑張っているって、開発部の皆が思ってるよ」

「努力家だしね。だからこそ可愛いんだけど……鷹沢部長にはまだ頑張り不足に思えるのかなあ」

古式が心配そうな顔をしている。

そうだ。雛田はよくやっていると。エース（予定）の俺が言うのだから間違いない。だが、鷹沢部長は、雛田が入社した初日から厳しかった。そして現在も、鷹沢部長の雛田に対する態度は一際冷たい。

言われた仕事を成し遂げても、称賛は一切なく新たな仕事が与えられるだけで、少しでも手間取っていると注意が飛ぶ。

鷹沢部長は冷徹な上司だが、決して無情ではない。部下の使い方を熟知している人だ

から、褒める時はちゃんと褒めるし、部下の実力も認めている。

それなのになぜか、雛田に対しては一貫して厳しいのだ。

「いい子なのに、なにが気に食わないのかなあ」

「今頃、ぼろくそに言われているのかねえ」

「開発部やめたいって言い出さないといいけど……。ほんと、鬼侍も加減しろよなあ」

俺達が輪になって話していると、唐突にガチャリとオフィスの扉が開いた。

現れたのは、鬼侍こと、鷹沢部長。相変わらずのしかめ面で、整った相貌は岩石のよう
に硬く厳めしい。

鷹沢部長は、こちらをジロツと睨んだ。

「皆さんで集まって、なにか問題でも起きましたか」

「あっ、いいえ！　なんでもないです！」

俺達は立ち上がり、ビシツと手を額に当てて敬礼した。まるで軍隊であるが、まさしく開発部は日々を戦う戦士の集まりである。研究費について常に文句を言う経理部と、素人のくせに開発商品へのダメ出しは一人前な営業部と戦う武士である。

様々な部署の板挟みになっているのに、鬼侍と呼ばれる鷹沢部長はいつだって動じない。毎日淡々と仕事をして、的確な指示を飛ばし、経理部を黙らせ、営業部には商品理解のための勉強会をこまめに行う。

恐ろしく仕事ができる上司なので頼りがいがあるものの、鷹沢部長の睨み顔はめっちゃくちや迫力がある。せっかく顔がいいのにもつたいないなと思うほど、部長からにじみ出る凍てついたオーラが怖い。実は社長子息って噂も聞くけど、勇気が出なくて誰も聞けずにいる。

こんな人とふたりきりになって、徹底的に絞られた雛田は、さぞかし恐怖しただろう。案の定、鷹沢部長から少し遅れる形でオフィスに戻った雛田は、疲れた顔をしていた。よっぽど怒られたに違いない。

「可哀想に……。後でチョコレートでも差し入れしてあげよつと」

古式がそう呟いて、自分のデスクに戻っていく。

俺も、缶コーヒートを奢ってやろうと思った。思わず開発部全員が同情してしまうほど、鷹沢部長の雛田へのスパルタ教育ぶりは有名なのだ。

第一章 仰天のワークミッション

——私は、仰天した。まさかこんな事態になつてしまうなんて、誰が想像しただろう。鷹沢部長との奇妙な面談の翌日。なんと私は新商品開発プロジェクトの総合アシスタントに指名されたのだ。

朝一番の朝礼の時、鷹沢部長はいつも通りの仏頂面で、ノンフレームの眼鏡のツルを、軽く指で摘まんで位置を正した。

「今挙げたメンバーが今期のプロジェクトの主軸ですが、新商品の開発は部全体の協力が不可欠です。皆で支え合い、開発部一丸となって頑張りましょう。それでは仕事に戻ってください。プロジェクトメンバーは私のデスクに集合するように」

鷹沢部長の号令で、開発部の皆はわらわらと自分のデスクに戻り、そして名を挙げられたメンバーは部長のデスク前に集合する。私もおそるおそる近づき、端に立った。

——うわあ、錚々たるメンバーだ。私を含めて全員で五人。もちろん全員先輩で、これまで何度もヒット商品をたたき出したベテラン揃い。それに比べて私は、まだ入社二年目の新人で、しかも通常業務は雑務全般。いきなりこんなプロジェクトに入れるよ

うな人材じゃない。

——悪目立ちしてないかな。どうして私が、このメンバーに入っているんだろう。所在なくオドオドしていると、鷹沢部長が咳払いをした。

「企画概要はこれから社内メールで送ります。来週頭にミーティングを行いますので、皆さんには企画書の作成をお願いします」

いつもの調子で、流れるように説明をしているけれど、私は驚愕のあまり、口をぽかんと開けていた。

だって、来週頭つて、土日挟んでもあと四日しかないじゃない！ それまでに企画書を作れって言われても、私、企画書なんて作成したことない！

どうしたらいいんだろう。先輩に聞けということなのか。忙しいのに、聞いて大丈夫なのか。そもそも『総合アシスタント』ってなに!? どんな仕事なの？

頭の中がグルグルする中、先輩達は冷静な顔つきで鷹沢部長に質問をしている。「前回の企画時に問題視された製造部との連携は？」

「社内チャットの確認を徹底するよう、向こうの部長と話をつけました。こちらもそのつもりで、意思疎通を心がけてください」

「上層部へのプレゼンはいつ頃の予定ですか？」

「遅くても二ヶ月後の予定です。半年後には製造ラインにのせたいですね」

次々と話が進んでいくけど、私はまったくついていけない。

いや！ここで空気に吞まれて黙っていたら、なんのためのプロジェクトメンバーなのだ。私だって、ちゃんと役に立たなきや。

とりあえず私も質問してみよう。

「はいっ！」

ビシッと手を挙げた。先輩達と鷹沢部長が、同時に私を見つめる。

「ひえ……怖い。新人がしゃしゃり出るんじゃないよとか思われたらどうしよう。

「あ、あの、その……私が指名された、総合アシスタントって、具体的になにをやるんでしょうか……」

怯えながら訊ねる私に、鷹沢部長は「ああ」と思い出したような顔をした。

「これから説明します。概要にも書いておきましたが、総合アシスタントは今回が初めての試みです。他に質問があれば、皆さんは企画書の作成を。雛田さんは私と一緒に来てください」

そう言って、鷹沢部長はすたすたとフロアから出ていった。先輩達は各々デスクに戻り、早速仕事を始める。

——うう、説明ってなんなの？もしかして、前にミーティングルームでされた奇妙な質問の答えがあるのかな。

メモ帳とペンをポケットに突っ込んでから私もフロアを出ると、エレベーターの前に鷹沢部長が立っていた。

「部長、どこに行くんですか？」

「会社の外です。車を使いますが、十分もあれば到着します」

——え、車……？戸惑う私を連れて、鷹沢部長は社員専用の駐車場に向かった。そして黒い車の前に立ち、ピ、と電子音を鳴らしてドアロックを解錠する。

助手席のドアを開け、私に顔を向けた。

「乗ってください」

「は、はあ……」

仕事の中なのに、いいのかな。いや、これから『総合アシスタント』の仕事内容が説明されるんだから、これも業務の一環なのか。

それにしても、変なの。どうして私だけ移動するんだろう？

戸惑いはあるが、助手席に乗る。

ところで、この車って、やっぱり鷹沢部長の自家用車なのか。そこはかとなく高級感に溢れた内装だし、上品なオーデコロンの香りがする。

うーん、やっぱり、社長子息って噂は本当なのかも。

鷹沢部長は運転席に座るとシートベルトを締めて、車を運転し始めた。

「説明不足なのは重々承知しているのですが、実際に現物を見ながら話をしたいんです。不安にさせていたら、すみません」

問答無用で私を連れてきたことを、少しは悪いと思っっているらしい。誠実な人だよ。私は「いいえ」と言っ、首を横に振った。

「後でちゃんと説明してもらえらなら、大丈夫です」

「ある程度の概要はプロジェクトのメンバーにも伝えてありますが、雛田さんに任せたい仕事はかなり特殊なもので、誰でもできる、とは言いがたいんです」

「そうですね……そんなすごい仕事、私にできるのかなって、心配ですけど」

一体どんな仕事を任されるんだろう。ドキドキしながら言うと、鷹沢部長は車を運転しながら、目を伏せた。

「雛田さんは目の前にある仕事を懸命にこなす方ですから、きっと仕事自体はうまくやってくれるだろうと思います」

思わず私は目を丸くして、運転席に座る部長を見た。

だって、こんな風に褒められるなんて初めてだ。いつだって私は鷹沢部長に叱られて、仕事のミスを注意されていたから。

「ありがとうございます。わ、私、いつまでも仕事が満足にできなくて、きっと部長に呆れられてると思っっていたから、嬉しいですよ」

「……私が、あなたに呆れる？」

ぼつ、と鷹沢部長が呟いた。そしてなぜか、不機嫌そうに顔をしかめる。

「鷹沢部長？」

「そんなことはありません。むしろ……」

ハンドルを握りながら呟く鷹沢部長は、ゆるやかに道路をカーブして、ブレーキを踏んだ。話の途中ですが、到着しました」

「あっ、はい」

なにを言いかけていたんだろう。頭の端で考えつつ、私は慌ててシートベルトを外した。助手席から降りて、目の前に建つ建物を眺める。

「おうち？」

首を傾げた。鷹沢部長が車を停めたガレージの傍にある建物は、紛れもなく住居だった。きよろきよろとあたりを見回すと、どうやらここは都内にある住宅地——それも『高級』がつくような場所で、周りの住宅はどれも敷地が広く、立派な建物が多かった。

庭には青々と茂る芝生が広がっ、白を基調とした住居は建ててから間もないのか、とても綺麗に見える。

「ここは鷹沢家が所有する土地のひとつです」

「鷹沢家……？」

首を傾げる。部長の苗字は確かに『鷹沢』だけだ。

「はい。最近私がい取ったので、今は私個人の所有物件になっていますけどね」

「な、なるほど。……え、買い取った？」

待って。高級住宅地で、こんなに敷地の広い建物を、あっさり買い取ったとか言ったの？ 一体どれだけ稼いでいるの!?! 私のお給料なんて、実家に生活費を入れるだけでカツカツだというのに。いや、手がけている仕事内容がまったく違うから、比べても意味がないのだけだ。

鷹沢部長はドアの錠を外し、真新しい玄関扉をガチャリと開けた。

「どうぞ。ここが、あなたの職場になります」

「え、私の……職場？」

目を丸くした後、おすおすと家の中に入る。ふわんと鼻孔をくすぐるのは、新しい住宅ならではの、みずみずしい木の匂い。

「あなたに仕事を任せるために、新しく家を建てたんです」

「へー、建てた……。建てた!?!」

ぎよつとして、鷹沢部長に顔を向けた。

彼は『なにか?』と不思議そうな顔をする。

——い、いや、ここが私の職場、というのもちよつと意味がわからないけど、そのた

めに家を建てたって。家って、そんな軽くポーンって建てられるものなの? なんかこう、金銭的なものが大変なことになるんじゃないの? 住宅ローンを組むとか。でもこの軽い言い方からして、鷹沢部長がローンで家を建てたとは思えない。恐らく、キャッシュでポンなのだろう。

わあ……結構、引くなあ……

部長と私との間に、ものすごい隔^{へだ}りがある。主に、金銭感覚的な意味合いで。

「玄関の奥がリビングです。そこにあるものを見れば、雛田さんにしていただく仕事かわかると思います」

鷹沢部長が、私の前にスリッパを置きながら言う。私は玄関におっかなびつくり上がり、スリッパに足を入れた。

「リビングって、ここですか?」

広い玄関ホールの正面にある、観音開きになった磨^かりガラスのドア。鷹沢部長は頷いてから扉を開け、私をリビングの中に招き入れてくれる。

そこは、想像していたよりもずっと広くて、お洒落な部屋だった。

日当たりのよい南側はすべて窓になっていて、爽やかな初夏の日差しが入り込んでいく。窓の向こうは芝生で、ガレージ側からは見えなかったけど、庭の奥にはパーベキューなどが楽しめそうな野外コンロが置かれていた。

リビングダイニングは大きなワンフロアになっていて、赤色のパネルが鮮やかなアイランドキッチンが見える。そして、近くには白色のダイニングテーブルや、ふかふかしたソファ。天井は吹き抜けで、茶色の羽根をくるくると回す、大きなシーリングファンライトが設置されていた。

「素敵なお部屋ですね……」

感心した眩きを零しつつ、ふと、壁にかけてあるスティック型のコードレス掃除機に目がいった。

——あれ、この掃除機……

私はもう一度、注意深くあたりを見回した。日差しを避ける遮光カーテン。食器を収納する戸棚。キッチンの棚に収納された数々の調理道具。

「もしかして、ここにあるものはすべて、ハバタキユーズの自社製品ですか？」

「その通りです。よくわかりましたね」

リビングの真ん中で、鷹沢部長が腕を組む。

「やはり雛田さんは観察力があるし、ひと目で自社製品と見抜くほど、うちの商品を把握している。普段から勉強しているのは知っていましたから、これくらいはわかるだろうと思っていましたよ」

「え、その、あの。別にそこまで言われるほどのことじゃないですけど……」

普段は怒られてばかりいるから、こんなに褒められると戸惑ってしまう。今日の鷹沢部長はなんだかいつもと違う感じがするけれど、気のせいかな？

「これからしばらくの間、あなたにはここに住んでもらい、ハバタキユーズの既存製品及び試作品を使用しながら生活してもらいたいのです。いわば、テストですね」

「……テスト？」

目を瞬かせて首を傾げる私に、鷹沢部長は頷いた。

「ハバタキユーズは、生活に要する製品を幅広く手がける製造メーカーです。つまり、いい商品を開発するには、実際の生活の中で製品を使用し、その使用感を緻密に調査する必要があります。私がそう提案しました」

「な、なるほど。だからテスト、ですか」

ようやく納得した。確かにハバタキユーズは生活用品メーカーで、その種類は多岐にわたっている。恐らく、庭にあるバーベキューコンロも自社製品なんだろう。うちはアウトドア製品や、カー用品、リネン製品など、生活に関するものはほとんど網羅しているけれども、当然ながら商品数は莫大にあるものの、これといった大ヒット商品がある……というわけでもないのが、ネックだった。

経営は安定しているけれど、逆に言えば『安定しすぎている』せいで、今以上の利益が見込めない。だからこそ、私のようなテストを用意して、もっといい商品開発に繋

げようと鷹沢部長は考えたのだ。

「ふむ……。でも、どうして私が選ばれたんですか？」

もつともな質問をすると、鷹沢部長は眼鏡を押し上げる。

「ひとつは、あなたが開発部の中で一番適任者だったからです。入社時から開発部でアシスタント業務につき、様々なラフを図面に起こしてきたでしょう？ あなたなら、製品の内部構造、コストと使い勝手の比率など、商品に対して様々な視点で見ることができると判断しました」

鷹沢部長が無表情のまま、淡々と説明する。顔つきは、普段私を叱る時とまったくかわらない。でも、話す内容が違った。

それって、鷹沢部長は入社当時から、私の仕事を評価してくれていたってことだね。ね。……うっ、ちよつと、嬉しいかも。

「また、雛田さんは開発企画グループに一切関わっていないというのもよかったですね。一度人間関係に情が入ると、どうしても付度が発生しますから」

「あ、それは理解できます」

つまり、仲のよい先輩が開発した製品があったとしたら、他のものよりもよく見えてしまう。または、先輩に気を使ってわざと高評価にすることもある。そういった理由でレビューの精査にブレが出てしまうことを、鷹沢部長は懸念しているんだ。

なるほどな。さすが部長。よく考えてるな。

「もうひとつ、理由があります。こちらは、前にあなたと面談した内容に関係します」

「えっ、もしかして、カレシがいるとか、好きな人がいるとか、あの……？」

やっぱりセクハラじゃなかったんだ。ちゃんと意味があったんだ。もちろん鷹沢部長に限って、そんなことしないってわかってたよ。

鷹沢部長が大真面目な顔で「はい」と頷く。

「私もここに住みますから。夫として」

「……………」

一瞬、彼がなにを言っているのか、わからなかった。

「……オット？」

鷹沢部長の言葉を繰り返して、首を傾げる。オット。といえば、オットセイ。ラッカセイ。ワッカナイ……いや、なんか違うな。

『夫、とは』と、頭の中で検索をかける。すぐさまピピッと検索結果が出た。

【夫】……結婚した男女のうちの男。

「でえええええっ!？」

頭の中で理解に至るまで五秒。

たっぷり考えた私は、改めてびっくり仰天きょうてんの声を上げた。

「おっ、おっ、お、おっ、オットトトトって、どういうことですか！」
ズサツとうしろに下がって、問い質す。

けれども、私の騒ぎに鷹沢部長は、眉ひとつ動かさなかった。なんとという銅の男！
いや、こんな時くらいは私と同じくらいリアクション多めでお願いしたい。

「今回の開発企画のコンセプトは『家族で使う』。私が夫役、あなたが妻役としてこの
家に住み、夫婦という共同生活の中で商品の価値を見つけ出したいのです」

言っていることは『なるほど』と納得できるところがあるけれど、それにしたって、
ふ、夫婦ってなんですかね。あと共同生活ってことは、もちろん一緒に住むんだよね？
「ちよっ……ちよ、ちよ……十秒ください」

うしろを向き、腕を組んで考える。

……そうか。彼氏はいないのかとか、好きな人はどうだという質問は、このためにあつ
たんだ。確かに、彼氏なんていたらこんなことは頼めない。いや、寂しい独り身ならい
いのかと問われたら、首を傾げちゃうけど。

でも、これは仕事だ。夫婦というモデルで生活し、発売済みの製品や試作品について
公平かつ率直にレビューするのが私の仕事。開発プロジェクトの総合アシスタントとし
て指名されたからには、ちゃんとやり遂げたい。

なによりも、ずっと私を叱り続けていた鷹沢部長が、本当はちゃんと評価してくれて
いた。その結果、プロジェクトメンバーの末席に入れてくれたんだから、このご恩は仕
事をすることで返したい。

「……でもなあ……一緒に住むって……うーん……」

やっぱり心の声が口から漏れてしまう。だってこんな奇想天外な『仕事』。戸惑う反
応が普通ではないのか。

私はチラツとうしろを見た。鷹沢部長はまったく表情を動かすことなく、私の返事を
待っている。

まあ、社内一ストイックと言われている部長だ。鋼の男だし、鬼侍とまで言われるほ
どの仕事人間だし、一緒に住んだからと言って危険はないだろう。

ふと、思い出すのは過去のこと。

けれどもすぐに首を横に振った。あれは終わったことだ。それに、『彼』は鷹沢部長じゃ
ない。

私は、学生時代に男性関係で辛いことがあって、それ以降、男性に苦手意識を持つよ
うになってしまった。就職してからも、鷹沢部長はもちろん、社内の男性社員も苦手で、
常に距離を置いている。仲良くなった同僚や先輩は、いずれも女性ばかりだ。

一時期は、それでいいと思ったこともあったけど……

やっぱり、このままじゃいけないって思う。過去のトラウマを乗り越えて、前向きに

生きなきやあって、考える時もある。

だからこれは、私にとつても、チャンスなのかもしれない。

鷹沢部長は、一緒に住んだからといって、いきなり襲ったりするような人じゃないと、この一年間で理解していた。真面目で、誠実で、誰よりも厳しい。それが鷹沢部長だ。

私は恐る恐る振り向き、彼に尋ねてみる。

「一応確認ですけど、寝る場所は別……ですよね？」

「二階には複数部屋がありますから、好きな部屋を選んで頂いてかまいません」

「なるほど。あと、期間はどれくらいですか？」

「予定では二ヶ月です」

二ヶ月かあ。ちよつと長いけれど、シェアハウスと思えば、なんとかやっつけていけるかな。

「わかりました。二ヶ月、ここに住みながら自社製品を試し、使い勝手を評価していけばいいですね」

「そうです。では、早速今週の土曜日、あなたの家に行きましょう」

「なんで私の家に来るんですか!」

ふたたびズサツと体を引いた私に、鷹沢部長は『なにか問題でも?』と言いたげに片方の眉を上げた。

「仕事とはいえ、いきなり男とふたりで暮らすのですから、あなたのご両親も心配する

でしょう? ですから、私が自ら説明に行きます」

「え、いえ、別にそこまでしなくても、さほどウチは心配性でもないのよ」

「そういうわけにはいきません。あなたは都内近郊にご両親と共にお住まいで、会社からも、この家からも、遠く離れているでしょう。そしてお宅は大根農家で、ひとり娘であるあなたを大切にしています。心配しないわけがありません」

「ちよつ……待。えっ?」

待て。なんでそんなに詳しいんだ。確かにうちは都心から離れたのどかな街にあり、会社までは電車を使って一時間かかる。そして家は大根農家で、私はひとりっ子だ。

パーフェクト上司・鷹沢部長ともなると、部下の個人データくらいは把握はかしているのかな……。いつ何時なんど、なにがあっても、即座に動けるように……とか。

う〜ん。さすが鷹沢部長だ。

どっちにしても二ヶ月の間、別のところで暮らすことは両親に言わなければならぬ。鷹沢部長の説明を受けたら、両親も納得するだろうし、安心もするだろう。

「じゃあ、お言葉に甘えて、両親への説明をお願いします」

気を取り直した私が頭を下げると、鷹沢部長は眼鏡のツルを摘まみ、いつも通りの無表情で「わかりました」と頷いた。

第二章 現状打破のみだらな提案

なんだか勢いのままに決まってしまった、私と鷹沢部長の期間限定同居生活。

ちなみに、私がしばらくの間テスターとして生活するのは、ちゃんと開発プロジェクトの概要に書いてあった。ただし、同居人がいることは秘されていたのだけだ。だからプロジェクトメンバーの先輩達には『しっかりテストしてね！』と頼まれた。中には、評価の内容について、事細かに項目を設定するこだわり派の人もいた。

私の意見のみで企画が決まるわけではないけれど、私が『よい』と評価をすれば、それだけ企画が通りやすくなるのは確かだ。

よく考えると責任重大である。公平に、誠実に、そして正直にレビューしなきゃ。個人の好みというよりも、大衆が使いやすいか、あるいは年齢別でシミュレーションしてみるのでもいいかもしれない。

私なら、広い視点で商品を見ることができると鷹沢部長は言ってくれた。あの言葉に^{こた}応えるためにも、よく考えて評価しないとイケないね。

さて、^{きょう}驚愕の日から二日経った約束の土曜日。

私は実家の最寄り駅で、鷹沢部長を待っていた。

今日、ふたりで実家に行くことは、両親には軽く説明してある。仕事で二ヶ月ほど別の場所で暮らすということ。上司と同居すること。そして、今日その上司本人が説明に来ること。

私の説明に、両親の反応は微妙だった。お母さんは口を開けたまま『へえ〜……』と相づちを打っていたし、お父さんはムスツとした顔でなにか考え込んでいた。

——やっぱり、男性と同居なんて反対なんだろうな。でも、これは仕事なんだし、同居者がどこから見てもストイックな鷹沢部長なら絶対大丈夫だろう。

ポケットからスマートフォンを取り出して時間を確認すると、午前十一時。そろそろ約束の時間だ。

部長には、駅前で待っていてほしいと言われたけれど……

私があたりを見回していると、しばらくして、一台の車が駅に近づいてきた。あまり目立たないけど、国産の高級車だ。見覚えのあるそれは間違いなく、鷹沢部長の車だろう。私が近づいたところ、助手席のドアがカチャリと開いた。

「おはよう」

「お、おはようございます」

「車で君の家に向かうから、乗ってくれ」

「は、はい……」

おずおずと助手席に座ると、鷹沢部長は車を運転し始める。

うわ、鷹沢部長の私服姿、初めて見た。てっきりいつも通りのビジネススーツで来ると思っていたから意外だ。その姿は想像していたよりもずっと格好良くて、驚いてしまう。初夏の季節に合った、白いリネンシャツ。軽く腕まくりした手首に嵌められたシルバーの腕時計は素敵なデザインで、いつもかっちりオールバックな髪も少しだけラフに崩している。

普段のスーツよりも薄着な姿は、鷹沢部長の無骨な体のラインを浮き彫りにしていて、不思議な色気に溢れていた。

——なんだろう。初めて私服の鷹沢部長を見たからか、妙にドキドキしてしまう。体も熱くなってくる。こんなに格好良いだなんて、反則だ。いや、鷹沢部長は元の顔がいから、当然私服姿も素敵だろうけど。

って、そういえば、鷹沢部長の意外な姿に圧倒されてそれどころじゃなかったけれど、今、敬語じゃなくて普通に話していた？

「あ……部長？」

「なんだ？　今は勤務時間外だから、部長と呼ぶのはやめてほしいんだが」

「えっ、あ、すみません。じゃあ、鷹沢さん……」

「これから夫婦という設定でしばらく一緒に暮らすというのに、苗字で呼ぶのか？」

「ええっ!?　じゃ、じゃ、じゃあ……なんとお呼びすればいいのでしょうか？」

会社で見ている鷹沢部長……いや、鷹沢さん？　と、口調も雰囲気も違いすぎて慌ててしまう。確かに今日は休日だし、外で部長呼びはおかしいかもしれないけど、なんだかやけに押しが強いような？

それに、私は鷹沢部長って呼ぶのが当たり前だったから、下の名前とか……覚えてない。
「稔、だ」

前を向いて運転をしながら、はつきりと、彼は名前を口にした。

「み……稔さん」

鷹沢稔。稔さん。

名前で呼ぶと一気に距離が縮まった気がして、恥ずかしくなってしまった。私、こんな調子で彼と同居なんてできるのかな。不安になってきた。

「君は雛田七菜。……七菜と呼んでいいか？」

「は、はい。い、いいですけど」

低く通る声で名前を呼ばれて、私の胸の鼓動はいっそう激しさを増す。

心の中がせわしなくざわめいて、私は戸惑いを覚えた。

——どうして？　こんな気持ち、初めてだ。

「七菜の家は、この国道沿いをしばらく走って、コンビニのある交差点を右に曲がり、小さな公園を通り過ぎた後、角を曲がった北側にあるんだったな」

「そそそそうですけど。なんでそこまで詳しく知っているんですか!？」

「できる上司は部下の住所まで覚えているのか。……え、まじで？ 世の中の上司って、皆そんな感じなの？ そんなわけないよね!？」

「七菜は俺の部下なのだから、緊急時に備えて住所を把握するのは当然だろう」

当然。そつ、そつかー、やつぱり当然なんだ……

「部長って、すごいですね」

「このくらいは普通だ。さあ、ついたぞ」

ゆるやかに車が停まる。気づけば、車は家の前についていた。

私が住む街は、都内だというのにのんびりとしたスローライフな雰囲気あふに溢れている。都心から電車で一時間も走ると、東京とうきょうとは思えないほどの田舎が広がっているのだ。

「車はどこに停めたらいい?」

「あ、どこでもいいです。このへんは全部うちの敷地なので」

農業を営む我が家は、自慢じゃないけど土地が広い。全体の八割が田んぼと畑なので、我が家は曾祖父そうそふの時代に建てられた古い平屋だ。一応、ところどころ修繕を重ねてい

るので住みやすくなっているけれど、パツと見はとでもオンボロである。

だからちよっと恥ずかしくて、あまり稔ついでさんは連れてきたくなかったんだけど、仕事だし仕方ないよね。

私は玄関の引き戸を開けて、声を上げた。

「ただいま」

「おかえりー!」

廊下の奥からばたと足音が聞こえる。うちの玄関ホールはこれまた無駄に広くて、なんのためにあるのかよくわからない、松の木を磨き上げた大きな衝立ついでが目の前にデーンと置かれていた。そして、飾り棚には木彫りの熊やら赤べこやら、曾祖父そうそふの時代から旅行先で購入した謎の置物がいっぱい並んでいる。

「いらっしやい。奥に入ってちょうだい」

やってきたのはお母さんだ。私は靴を脱ぎ、稔さん用のスリッパを用意する。

「お父さんもいるんだよね?」

「もちろんよ。それにしても……」

お母さんはまじまじと、玄関に立つ稔さんを見つめた。頭の前から靴の先までゆつくりと視線を動かして「はあ」とため息をつく。

「七菜……、あなたまた、すごい上玉じょうたまたまを掴んだのね」

「上玉じょうぎよって言うな！」

「初めまして。七葉さんの上司を務めております。鷹沢稔と申します」

稔さんが深々と挨拶あいさつすると、お母さんは「まあまあ」と、両手を合わせてニコニコと微笑んだ。

「どうぞ、立ち話もなんですから」

「はい。失礼致します」

靴を脱いでスリッパに履き替えた稔さんを連れて、母の先導で廊下を歩く。やがて居間の扉を開けると、父が畳の上ののっしり座っていた。

一見すると厳かたついである。体が大きくて、ゴリラみたいな人だなあと子供の頃から思っていた父親だ。とてもパワフルで、米俵こめだわらくらいなら片手で持ち上げてしまう。

趣味は筋トレ。そして毎週末、街の消防団長として夜間パトロールをしている。

そんなお父さんは、ギロリとこちらを睨にらんだ。

——えっ、もしかして、怒こってる？ 今回の同居仕事について、まさかの大反対とか……？

こんなに怖い顔をしたお父さんは初めてで、私はおずおずと畳に座った。

隣に稔さんが正座をして、手に持っていた紙袋からふたつの品を取り出して目の前に置く。

「初めまして。先にお近づきの印として、こちらをお納めください。日本酒と鯖さば寿司です」
「むっ……!?」

お父さんの目がギラリと底光りした。そして早速、日本酒の箱を開ける。

「こ、これは……！俺がこの酒が大好物だと知って、わざわざ取り寄せてくれたのか!?」

「はい。淡麗たんれいかつ辛口の地酒が好きだとお聞きしました。お母様は、鯖さば寿司がお好きだそうで、こちらは京都きょうとから取り寄せた一品になります」

「まあ！有名な料亭の鯖さば寿司じゃないですか。わあ、ありがとうございます！」

両親はあっさり稔さんに買収されてニコニコした。半端はんぱなくちよろいよ、両親！それにしても、私は一言も稔さんに両親の好みなんて話してないけど、どうやって知っ

たんだらう。部長クラスになると、部下の両親の好物を把握はあくしておくのも常識なのだろうか。

「本日は突然お邪魔してすみません。七葉さんから話は聞いていますますが、まずは私から説明をさせていただきます」

稔さんはきつちりした正座を崩くずすことなく、真面目な顔で話し始めた。

「実は、私の父はハバタキキューズの社長をしております、私も将来は父の跡を継ぐべく、今は開発部の部長として日々勤いそんでおります」

「まあ……社長の息子さんだなんて、すごいですね〜」

お母さんが目を丸くして驚いた。私もぽかんと口を開けて、隣に座る稔さんを見上げる。――前から社長子息って噂は聞いていたけど、やっぱり本当だったんだ。

うーん、ますます仕事とはいえ私なんか同居していいのかなと思うんだけど……
 「それで、今回の業務内容につきまして、今よりも素晴らしい商品を開発するために、七菜さんには商品テストターとして私と夫婦という体で共に暮らしてもらいます。七菜さんには快適な毎日を送ってもらえるよう、私は努力を惜しまないつもりです。どうかご許可を頂けないでしょうか」

稔さんは会社でいつも見ている真面目な顔つきで、まっすぐに両親を見つめた。

両親はお互いに顔を見合わせ、こくりと頷き合う。

そしてお母さんがニツコリと笑って、パンと手を叩いた。

「もちろん、こちらはかまいませんよ。むしろ、どうぞどうぞって熨斗つけてあげちゃいたいくらいです！」

「お、お母さん、そこまで言う!?」

私が慌てて非難すると、腕を組んだお父さんが厳かな口調で言った。

「どうせなら、そんな契約じみた話でなく、本物の夫婦を目指してくれてもいいくらいだ」

「お、お父さんまで、なに言ってるのー!?」

―― けっ、結婚を前提とか。本当にやめてほしい。なんでそんなに乗り気なのだ。

「だって大企業の社長子息なんて超優良物件じゃない。しかも、とても真面目で誠実そうなお方だわ。七菜がこんな人を連れてきたのなら、手放して喜ばないほうがおかしいでしょ? ここでゲットしない手はないわー!」

「本人を前にに言ってるのー!? 仕事! これは仕事だから。夫婦っていう設定で商品をテストするだけなの!」

「いいじゃないか。仕事は仕事としてしっかりやりながら、ついでに愛も育んだら。稔君はまさにカモがネギしょってきたような男じゃないか。うまくすればコレも期待できそうだし」

「お父さん、指でマルを作らないで! 品がなさ過ぎるからー!」

もうヤダ。うちの両親は終始こんな感じで調子がいいから、稔さんは連れてきたくなかったのだ。いい意味でも悪い意味でも庶民的だし、基本的に雑草根性というか、言い方を変えると大変あつかましいので、洗練された世界に住んでいそうな稔さんとは徹底的に相性が悪いと思う。いや、こういう風に明るくてなんでも話してくれる両親だからこそ、私も救われてきたところはあるんだけど。

稔さんは、私達親子の騒ぎをずっと黙って見ていた。やがて、ゆつくりと口を開く。

「それでは、せっかくなのでお言葉に甘えさせて頂きます」

「えっ?」

私は思わず稔さんに顔を向けた。彼は平然とした顔つきで、眼鏡のフチを光らせる。「これからの二ヶ月の同居は、結婚を前提とした、期間限定の夫婦生活とさせていただきます。そのほうが、私としても話が早くて助かります」

「なななな、なにを言ってるのですか、稔さん!」

両親に感化されて、稔さんまでおかしくなってしまったのだろうか。私が『気を確かに持って!』と、稔さんの目の前で手をヒラヒラ振ると、その手首をグッと掴まれた。

「好きだ。ずっと前から君が好きだったから、問題はまったくない」

「……………」

茫然と、稔さんを見つめる。向かいでは両親が「ヒューヒュー」とか言ってるけど、まったく頭に入ってこない。

「ずっと、どうやって君に想いを告げようか悩んでいた。こんな俺では好きになってもられないだろうと。しかし、ご両親が前向きに考えてくれるのなら、俺も考えを改めた。七菜、どうか俺の気持ちを受け入れてほしい」

「う、受け入れろって言われても、こ、困ります。私が……好き、だなんて嘘でしょ? だって、入社してからずっと……………」

私は困惑して俯いた。

稔さんは、基本的に誰に対しても厳しい人だけど、私はとにかく、なにかあるたび稔さんに怒られていた。

「図面がちゃんと引けていないとか、ミーティングの議事録が不十分だとか。とにかく頻繁に注意されていて、いつも同僚や先輩になくさめてもらっていた。だから私はずっと稔さんに嫌われているんだと思いついで、落ち込んでいたのに。」

なぜだ。どうして? ああもう、全然話についていけない!

「七菜、難しく考えなくていい」

「そう言われても」

私の手首を握ったまま、稔さんが言葉が続けた。

「この機会に、君も俺のことを考えてみてほしいんだ。試用期間だと思って、俺が君の夫にふさわしいかどうかを、試してくれ」

「そ、そんな、自分を試作品みたいに言わないでくださいよー!」

私の絶叫にも似た非難の声は、儂くも初夏の風と共に流されたのだった……



なんだかよくわからないうちに、えらいことに巻き込まれてしまった気がする。

ほんやりと会社のデスクを見つめて、私は長いため息を吐いた。そうして、この一週間のことを思い出す――

私の両親への挨拶という大イベントが、台風のように過ぎ去った次の日、早速私の引越しが始まった。

そして私の私物は一切合切、あのモデルハウスのような家に移動させられて、心の準備もないままに捻さんと共同生活が始まってしまったわけだけど……

「そうは言っても、いきなり夫婦らしくなんて、無理だよね」

ぼつりと呟き、仕事の続きを再開する。

――あれは、共同生活開始、一日目のことだった。

朝、実家ではない真新しいベッドで目覚めた時は、なんとも言えない違和感が満載だった。すべての事象が早送りのように進んでしまったせいで、自分の脳が、まだ現実を受け入れていなかった。

ボンヤリしながら一階に下りて、あくびをしつつリビングの扉を開けたら、そこではビシッと髪を整え、パリッとビジネススーツを着ている捻さんが、コーヒーを淹れていた。

『おはよう』

その一言で、急激に目が覚めた。

『朝食は和食にしたが。コーヒーは食前と食後、どちらに飲む？』

『あ、あ、あ……あ？』

語彙力が一瞬で破却された私は、自分のぼさぼさの髪とノーメイクの頬を交互に触った。

『君は寝る時、パジャマを着るんだな。いちご柄が、とても似合っている』

『い、ちご……』

私は髪を掴んだまま、自分の着ている服を見た。赤いいちごがたくさんプリントされた白いパジャマ。

『……！ ちよつ、ちよ、ジャストアモーメントー!!』

私は瞬時に胸を腕で隠し、ばたばたとリビングから逃走した。

なんてことだ！

パジャマ姿を見られたのも、ノーブラなのも、メイク前のすつびんなのも、髪をセツトしていないのも、なにかもが恥ずかしい。全日本羞恥心選手権があったら、間違いなくトップに躍り出るレベルだ。

ふたり暮らしっていうことは、そういうことなんだと、ようやく私は理解した。こういう姿を見られるのは、両親ならなんでもないことだけど、相手が捻さんなら話は別だ。これはもう、朝からまったく気が抜けない。

ちなみに、捻さんが作ってくれた朝食はめちゃうくちゃ美味しかった。温かいあさりの

味噌汁に、ふわふわのだし巻き玉子。香ばしい焼き鯖さばに、サラタまで。文句なしの百点満点である。

それに比べて私は、朝から家事らしいことをなにもしていない。せいぜい食器を食洗機につつこんでボタンを押したくらいだ。

ハバタキユーズの社長子息で、仕事が完璧にできて、頼りがいがあるって、お顔が素敵で、スタイルもよくて、料理が上手って、どんだけパーフェクト超人なのだろう。

ご飯が美味しすぎて、無言で食べきってしまったけど、ちゃんと『美味しい』って言えばよかった。言うタイミングを逃したまま出勤時刻になってしまっただけで、そんな日々をもう一週間も過ごしている。淡々と、淡々と、会話らしい会話もなく。

「このままじゃ、いけないよね……」

チラ、と横目で部長席を見る。今日、稔さんは会社にいない。朝礼を終えた後、製造工場のある地方に出張したのだ。日帰り、帰りは駅から直帰するらしい。

このままではいけない。

ずっと思っていたことだ。このままだと、まったく仕事にならない。

私の仕事は、あの家にある生活用品について夫婦で使う想定でレビューすること。今週末には、ある程度の報告書を提出しないといけないし、そのためには、稔さんと夫婦として協力し、意見を出し合わないといけない。

いつまでも緊張していたらダメだし、怖がっていてもダメだ。

それに私は決めたじゃない。稔さんと一緒に暮らすことで、男性への恐怖心を克服しようって。

自分が変わりたいと思っているんだから、ちゃんと向き合わないと。

「そうだよ。ちゃんと話し合わなきゃ」

相手は鬼侍だし、見た目はすごく怖いけど、誠実そうだし、なにより真面目だ。

「それにすごく格好良いし、スーツ姿が似合っただけで、家で上着を脱いだネクタイとワイシャツ姿とか、めちゃくちゃ色っぽくて……ううっ」

稔さんの、あの姿を思い出すと、いつも胸の鼓動が激しくなる。慌てて首をぶんぶん横に振って、彼の姿を頭からかき消す。

会社でも家でも基本的にきっちりしている稔さんだけど、やっぱり家に帰ると少しは気持ちがいいラックスするのか、心なしか表情がゆったりしている。その、ほんの少し疲れたような、気の抜けた顔には非常に色気があって、私は直視できないほどドキドキしてしまうのだ。

男性と一緒に暮らすというのが、こんなにも気が気じゃないなんて！

全然知らなかった……。一応これでも、過去に男性とつきあったことはあるのに、あの頃は全然そんな気持ちにならなかった。

ということ、やっぱり稔さんが特別なの？

そう考えた途端、冷めかけていた熱がふたたびぐんぐんと顔に上がって、デスクに肘ひじをついて頭を抱えてしまう。

そんな。気のせいだ。だ、だって、まだ一緒に暮らして一週間だし！

でも、稔さんは……私が好き……なんだよね？

「いや、それが一番謎なだけどー！」

ぶつぶつ、ぶつぶつ。

今日はやけに独り言が多い。悩みが多いからだな、うん。

とにかく。いつも美味しい朝食を頂いているのだから、今日くらいは夕食は私が作ってお返ししよう。そして今後のことについて、ちゃんと相談しよう。

相手は鬼でもモンスターでもない。言葉が通じる人間なんだ。

我ながらすごい無理矢理な納得のしようだと思いつつ、私はいつも通りの雑務を片付けるのだった。



終業時刻のチャイムが鳴って、自分のデスク周りを片付ける。同じように帰り支度を

し始める同僚や先輩に挨拶あいさつして、私は足早に会社を後にした。

うちの会社は基本的に私服で、制服はない。男性社員はビジネススーツが圧倒的に多いけど、女性社員は割と好きな服を着ている。さすがに奇抜な服の人は少ないが。

今、私が着ている服も、白い襟シャツに、ベージュのスキニーパンツというシンプルな装いである。こんな感じでも許されるのは、ハバタキユーズのいいところかもしれない。

まあ、噂によると、めちゃくちゃファッションチェックが厳しくて、女性同士のマウント争いが激しいという地獄みたいな部署もあるそうだけど……少なくとも開発部は平和である。きつと、そういう不毛な諍いさかいを許さない雰囲気満載な稔さんが部長だからだろう。喧嘩するヒマがあるなら、企画のひとつでもあげてください。とか、冷徹に言いそう。

家に帰るのに、実家だったら一時間かかっていたけれど、今住んでいる家は電車に乗ってひと駅。会社に近いのは純粹に嬉しい。

家に帰る前に、駅前のスーパーに寄る。

そういえば、稔さんはなにが好きなのかな？ あの調子だと好き嫌いなんでなさそうだけど。逆に、そんな可愛い弱点でもあったらいいのに。

ま、私の作れる料理なんて大したものではない。稔さんの作る朝食より大分グレードダウンしちゃうけど、そこは我慢してもらおう。

世の中には、私のようにあまり料理しない人間でも、なんとか人並みに作れる便利なものがたくさん売っている。

そのひとつがこれ！ 炒めた野菜とお肉にかけるだけで本格中華料理ができあがる、魔法の液体！ 調味料などが全部袋に入っているので、計る必要もない。パッケージの裏面に書いてある通りに作ればOKというしろもの。

お味噌汁くらいなら作れるので、オーソドックスにワカメと油揚げにしよう。それから副業にはなにかいいかな。メイが中華だから、春雨^{春雨}サラダなんて合いそう。これも簡単だし、材料さえ買えば大丈夫だ。

必要なものを買って揃えて、家に向かう。すでに合鍵をもらっているのです、私は玄関の鍵を開けて中に入った。

「ただいま……って言っても、誰もいないよね」

実家なら家族がいる。台所から美味しそうな匂いが漂って、お母さんが「おかえり〜」って出迎えてくれる。でもここには、私と稔さんしかいない。

「う〜、本当に大丈夫かな。やつぱり私、大変なことをしてかしている気がするよ……」
男性とふたり暮らしなんて初めてだし、どうしても緊張してしまっ

だ、だが。仕事だもん。頑張らないとね。

先日稔さんに言われた『七葉が好きだ』という爆弾発言は、後で本人に問い詰めると

立ち読みサンプル はここまで

して、まずは夕食を作ろう。

「そうだ。どうせだから、試作品や発売済みの製品も積極的に使ってみよう」

そもそも、そのために住んでいるんだしね。

キッチンには、ハバタキユーズ製の調理道具が揃っている。私は野菜のカットに自社のチョッパーを使ったり、新製品のフライパンやトングで料理を作った。

そして炊飯器が炊き上がりのアラームを鳴らした時――

「ただいま」

稔さんが帰ってきた。リビングの扉が開いて、ビジネススーツ姿の彼が現れる。

「おっ、おかえりなさいっ」

ぴっと背筋を伸ばして、緊張しつつ声をかけると、稔さんは私をジッと見て頷いた。

「夕食を作っていたのか」

「ハ、ハイ。たいしたもの……っ、つくってない、ですけど」

しゃもじを両手で持って、たじたと答える。

――ああもう、怖がっちゃダメなのに。やつぱりコワイ。立ってるだけで無視できない威圧感があるし、顔は無表情だし、眼鏡をかけた目は余計に冷たく見えてしまっ

「着替えてくるから、少し待ってもらえるか？」

「だ、大丈夫です。はい」